ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　来夢音の投げた黒く煌びやかなボール、ゴージャスボールから出てきたのはドラピオンとリングマだ。出てくるや否や、二匹はリングマの群れに突っ込んでいく。

「ドラピオン、シザークロス！　リングマ、アームハンマー！」

　そして来夢音の指示で、二匹は技を繰り出し、敵のリングマ達を薙ぎ払う。

　攻撃された事で、ようやくリングマ達も来夢音達の存在に気がついたようだ。五匹の内、三匹がドラピオンとリングマに襲いかかる。

　だがドラピオン達と、敵のリングマ達との間に、黒い巨体が姿を現した。カビゴンだ。両腕を広げ、リングマ達をドラピオン達の方へ通さない構えでリングマ達を睨んでいた。

「こっちも忘れないでよね！」

　かつては六塚の、今は雅也のポケモンである。丁度いい機会だから、バトルさせてみようと思ったのだ。まさかいきなりピカチュウ達と同じ練習をさせる訳にもいかないし、ましてや練習試合なんて以ての外だ。だが戦闘能力は流石に他の五匹にはかなり劣るものの、それでもジャックのガブリアスを相手に生き残っただけの実力はある。ちょっと凶暴な野生のポケモンくらいなら、他のポケモンと強力すれば十分に戦えるだろう。

　唸り声を上げて突進してくる三匹のリングマの攻撃を、カビゴンは全て自分の体で受けた。危うく後ろに倒れそうになるが、それでも足に力を込めて踏ん張り、何とか堪える。

　そして、突進してきた三匹のリングマの内、一匹をがっちりとホールドして離さない。他の二匹はすぐさまカビゴンから離れたが、捕らえられたリングマは苦しそうな呻き声を上げた。

　それを見て、雅也は思わず感心の声を上げる。

「……へぇ。中々タフだね。そこだけなら、他の皆にも負けてないかも」

　為す術無く倒れるとは思っていなかったが、それでも左右に受け流してダメージを減らすだろうと考えていたのだ。まさかあんな風に、リングマの動きまで封じてしまうとは予想していなかったのである。拓馬が喜びそうだなと、雅也は思った。

　しかし、ここからどう指示を出せばいいか、雅也はふと困ってしまう。こういう場面に、彼は自分の側で直面した事が無いのだ。この手の場面は拓馬の方が得意っちゃ得意なのだが、そうは言っても、彼もいつもこんな場面の起こる戦い方をしている訳ではない。タテトプスやベイリーフはこのような場面が割と見受けられるものの、リーフィアやエアームドの時は寧ろ『攻撃を躱す』ような戦い方をするので、このような場面は起こりづらいのだ。そして、拓馬は大抵、自分達とのバトルの時はエアームドとリーフィアをよく使う。

　つまり何が言いたいかというと、戦い方が分からないのである。このまま横にいなさせるのがベストなのか、近距離で攻撃させればいいのか。だが、攻撃させればカビゴンも反動でダメージを受けてしまうかもしれない。

　そもそも考えてみると、雅也はカビゴンがどんな技を使えるのか知らなかった。冷たい汗が、雅也のこめかみからツーっと流れる。

「……どうしよう」

　そう呟いて出てきた言葉は、幸か不幸か、誰にも聞こえなかったらしい。

　指示がないので、カビゴンはそのままリングマを捕らえたままだ。だが、いつまでもその状態が続くことなど無いだろう。現に、今も捕らえられたリングマは腕や体をジタバタとさせており、カビゴンもホールドを保つのに四苦八苦している。早く何とかしなければ、かえってカビゴンが危険だ。

　他の二匹は来夢音のドラピオンとリングマが相手をしているものの、こっちもいつまで持つかは分からない。

　そして問題なのは白だ。一人でリングマ二匹を相手にしており、たった今、ピジョンが気絶させられた。元々彼とそのポケモン達はサポートに徹するタイプなので、アタッカーのいないこの状況は、非常に危険だと言わざるを得ない。

「カ……カビゴン、投げろ！」

　取り敢えずそう叫び、指示を出してみた。すると、カビゴンは言われた通りにリングマを投げ飛ばす。というか、突き飛ばす。

　運の良いことに、突き飛ばした先には白を襲っていた二匹のリングマの内、一匹がいた。両者は互いに激突し、もみ合うように地面に倒れる。

　一瞬だけ出来たこの隙を、逃すわけにはいかない。

「白！　こっちだ！」

　雅也がそう叫ぶより前に、白も何をすればいいのか気がついたようで、残ったリングマの攻撃を躱したプララ、マナナの後に続いてこっちに走り出していた。ピジョンは既にボールの中だ。

　だが、攻撃を外したリングマは、すぐさま体勢を切り返す。およそリングマの体型からは想像出来ないような巧みな身のこなしで、白とプララ、マナナにアームハンマーをかましてきた。

だが――

　振り回していたリングマの腕に、バレーボール程度の大きさの橙色のエネルギー弾が勢いよく命中し、爆発する。その衝撃で、腕があさっての方向へ逸れた。見ると、来夢音のリングマが、白達を助けようと気合玉を敵に放ったらしい。自分達も二匹のリングマを相手にしているにも関わらずだ。

　しかしそれ故か、よそ見をした来夢音達に一瞬の隙が生じた。

　パチンと白にウインクを飛ばす来夢音の後ろで、二匹のリングマが揃って切り裂くを繰り出していた。気配を察したドラピオンが、慌てて攻撃から身を守ろうと腕を交差させる。少し遅れて、来夢音のリングマも主人を守ろうと、攻撃と彼女との間に自分の体を割り込ませた。

　そうされてようやく、来夢音も攻撃されている事に気がついたらしい。大きめの目をさらに開いて、その後すぐさま目をギュッと閉じた。

　だが、いつまで経っても攻撃の余波がこない事に疑問を感じた彼女は、すぐさま、それでも恐る恐るといったように目を開ける。

　するとそこには、敵のリングマの切り裂く攻撃が、まるで盾のように広がった電流の膜に阻まれ、途中で止まっている光景があった。

　慌てて振り返ると、白のプララとマナナがこちらに向けて伸ばした腕から、電流が細く迸っていた。

「は……白！」

「お嬢様には、指一本触れさせません！」

　どうやら白も、自分達もリングマに襲われているにも関わらず、来夢音達の方にちゃんと意識を向けていたらしい。

「白！　ぶじでよかった……！」

「お嬢様こそ、お怪我も無いようで……」

　合流した二人は、互いに指を絡ませ合って再開を喜び合う。近くで見ていた雅也は、何だか自分がお邪魔虫のような気がしないでも無かったのだが、生憎今は戦闘中。無事を喜ぶのは、後にして貰いたかったのだが……まあ、二人の反応も無理は無いだろう。

　ふと雅也が周りを見渡すと、揉み合いになってしまったリングマや、攻撃されて体勢を崩したリングマ達も、ゆっくりと自分達を囲んでいることに気がついた。見たところ、そこそこ攻撃は受けたものの、あまりダメージはなさそうだ。

「……あれ。ちょっとマズイかな？」

　思わずそう呟いてしまったのは、他の味方にも聞こえてしまったらしい。白と来夢音も、今の自分達の置かれている状況を思い出したようだ。慌てて、二人も戦闘に集中しなおした。

「ねえ……どうしよう？」

「いや、来夢音。僕に聞かないでよ」

「そうは言っても、こういった経験は、雅也の方があるのではありませんか？」

「白まで……そう言われてもなあ……」

　白と来夢音は交互に雅也に助言を要求するが、不幸なことに、雅也にこのような経験は無い。正確に言えば、ここまでしてあまりダメージを受けない程タフな野生のポケモンを相手にしたことが無かった。ついこの間まで、森でオーロットの群れと戦ってはいたものの、オーロットもこのくらい攻撃してやれば、もっと目に見えるダメージはあったのである。

　タフなポケモンと言えば拓馬だが、彼とポケモンバトルをする時も毎回シングルバトルなので、こんな風に囲まれた時の戦い方など雅也は知らない。

「えっと……どうやって倒せば、倒せるのか、倒したら……ん？　『倒す』？」

　何とか打開策を見つけようと頭を捻っていた雅也は、ここでふと、自分が先程からずっと、呪文のように繰り返し唱えていた『倒す』という単語に、疑問を覚えた。頭の中には、とあるイメージ。何度も何度も、その一部始終が繰り返され……

　そしてその瞬間、彼の全身に、電流が走る。

「……そうか。違ったんだ」

「……？」

「雅也、どうしました？」

　声のトーンが少し低くなった雅也の声に、二人は首を傾げながら――それでも目は敵のリングマから離さず――尋ねる。だが、彼の耳には届いていない。

「そうだよ……最初から全部、間違っていたんだ……」

「ねえ、どうしたの？」

「だ……大丈夫ですか？」

　聞き取り辛い程に掠れた声で呟く彼に、堪らず二人も相手から目を離し、雅也の方に向き直った。

　その時見た彼の様子は、小学生が見るには中々に異様なものだっただろう。

　彼の顔は青ざめ、目はだんだんと虚ろになっていくのが白と来夢音にも手に取るように分かる。体も、さっきから糸が切られた人形になるかのように、何度も何度も力が抜けていた。

　しかし、それも言葉を失った白に、肩を揺すられたことによって戻る。

「あ……あの、雅也！　大丈夫ですかっ？」

「そ……そうだよっ？　何かへんだった！」

　その時の二人の声が、彼の頭にやけに響いた。

　雅也は慌てて頭をブンブンと横に振り、両手で自分の頬を叩く。

「ご……ごめん。ちょっとボーッとしてた」

　まだ掠れてはいたが、それでもちゃんと聞き取れる声で、雅也は二人に謝る。さっき『こんな場合じゃない』などと思っておきながら、自分がこれでは良くないと反省し、彼は周りを囲んでいるリングマを見回した。

　そして、地面を見る。やや粘り気があるものの、それでも十分な固さはありそうだった。

「……二人共、ちょっと聞いて欲しい事があるんだけど、耳貸してくれる？　ここを何とかする作戦なんだ」

「……？」

「え……ええ。分かりました」

　頭に『？』マークを浮かべて雅也の言う通りする白と来夢音。雅也は素早くソレを伝えると、二人共目を見開いたのが分かった。

　だが、彼等が何かを言う前に、雅也はカビゴンに指示を出す。

「カビゴン。使えるかどうか分かんないんだけど……地面に、メガトンパンチ」

　するとカビゴンは頷いて、腕を大きく振りかぶる。どうやらメガトンパンチは使えるらしい。

　勢いよく地面に向かって振り下ろされたカビゴンの拳は地面に激突。その衝撃は直径二メートル程度のクレーターを作り出し、

　同時に大量の土煙が巻き起こった。